解　題

【1】秘蔵記

写1冊

〔書名よみ〕ひぞうき　〔著編者〕伝空海記
〔写刊年次〕南北朝期

〔外題〕秘蔵記
〔内題〕ナシ
〔その他〕〈尾〉秘蔵記

〔残欠状況〕全　〔保存状況〕大破　〔欠損〕ナシ　〔装訂〕粘葉装
〔丁数〕六十二丁（三十一紙）　〔本文用字〕漢字　〔一面行数〕七行、一行十七字　〔界線〕ナシ　〔表紙〕香色・無地　〔法量〕縦二十五・二×横十五・五糎　〔料紙〕楮紙打紙　〔書入〕校異（墨）・異本注記（墨）　〔印記〕ナシ　〔表紙書入〕（右上）禅之箱（右下）丈六堂無量寿院　〔付属〕包紙あり　〔補修〕あり（補修後の虫損あり）
〔備考〕隠丁付あり。付訓あり。表紙見返左下に「文海」と署名あり。

〔奥書〕ナシ

〔解題〕

『秘蔵記』は、密教における事相と教相の重要な項目や問題点を、百章ほど掲げて解説したものである。弘法大師空海（七七四～八三五）の教学思想を示すものとして、古来、真言宗の学者の間では重視され、研究注釈が盛んに行われてきた。

内容は、一定の方針で統一的に述作されたものではなく、師説を聞き、経疏の文を引いて、随時に集録するという形をとる。具体的には、「両部曼荼羅」「四種壇方」「三部五部」「道場観」「三句五転」などの約一〇〇条からなる。

一貫した編著でないため、章段の分け方は写本によって註釈の解釈によって相違する。最も古い註釈の一つである貞応元年（一二二二）の深賢記『蔵中冶金抄』が八七章とし、現在最古の写本である仁和寺の寛弘八年（一〇一一）写本や宥快の註は九〇章に分ける。東寺の杲宝が諸本を校勘して一〇〇章に分けると、それ以来、この一〇〇章に分ける説が多くなった。円覚寺蔵写本においても、明確に章段が分けられているものではないことがわかる。

現在、活字も多く刊行されており、以下のものが入手できる。

・『大正新脩大蔵経』図像部第一巻
（大正一切経刊行会編、一九二四年）
・『弘法大師全集』第二輯
（増補三版、密教文化研究所編、一九六五年）
・『真言宗全書』第九巻（続真言宗全書刊行会編、一九七七年復刊）
・『弘法大師空海全集』第四巻実践篇（筑摩書房、一九八四年）
・『定本弘法大師全集』第五巻
（密教文化研究所弘法大師著作研究会編、一九九三年）
・『秘蔵記』（平成版　真言口訣大系Ⅰ、大澤聖寛編著、四季社、二〇〇二年）書き下し文・現代語訳・語註あり。
・『仁和寺蔵本　秘蔵記―翻刻・校訂・現代語訳―』（大澤聖寛編著、ノンブル社、二〇〇九年）影印・活字・現代語訳あり。

本書の成立については、長らく議論があり、また空海の著作かどうかについても議論がなされてきた。

まず、『秘蔵記』の作者についてであるが、古く、『仏書解説大辞典』

に、加藤精神氏が、以下の四説にまとめて紹介している。

①不空三蔵の口説を、恵果和尚が記した

②恵果和尚の口説を、空海が記した

③広本・略本共に、唐の文秘の記で、入唐した円行が日本に伝えた

（大村西崖氏の説）

④略本は、空海または杲隣等の口説を円行が筆録、

広本は、さらに円行が入唐中に、文秘から教示されたものを略本の末尾に増補した（加藤精神の説）

①の説は、台密の学者が多くこの説を採るが、東密の学者である深賢や杲宝等によって批判されている。

以降、様々な研究によって検証されたが、今日では、弘法大師空海以後に、日本で撰述されたものと考えられている。

またこのように、現在、空海の著作とは考えられていないのだが、いずれにしても空海の思想に関わりを持っているものであるという見解から、『弘法大師空海全集』第四巻など、空海の全集に所収されている。

作者が議論されるのに合わせて、『秘蔵記』の成立も問題とされていた。この点を詳しく論じたものには、甲田宥吽氏の解題（『定本弘法大師全集』第五巻）があり、それを踏まえて発展させた研究が米田弘仁氏「『秘蔵記』の成立年代」（『密教文化』一八六）である。その米田説への反論が大澤聖寛氏「秘蔵記の成立年代再考」（『印度学仏教学研究』四七・二）と考えられよう。また近年、細川真永氏は「秘蔵記の成立問題」（『高野山大学大学院紀要』一一）で、上記の研究史を簡明にまとめている。[1]

これら諸説の成立についての結論は以下の通りである。

・向井隆健氏……脅然帰朝の永延元年（九八七）以後の成立。

・甲田宥吽氏……『円城寺八巻次第』等から、約九〇〇年頃の成立。

・米田弘仁氏……円行の帰朝年（八三九年）から『円城寺八巻次第』の著者益信の没年（九〇六）までの間の成立。

・大澤聖寛氏……真雅（八〇一～八七九）の『六通貞記』（八七八年成立）に『秘蔵記』の引用があることを根拠に、八八五～九一〇年頃の成立。

結局のところ、諸説あって定説を見ないが、成立論を整理した細川真永氏は、『秘蔵記』の成立年代の上限を、宗叡の帰朝した八六五年の可能性を残し、また下限については、九〇〇年頃には成立していたとしてまとめている。

さらにはこの『秘蔵記』という題名も、略本系にはもともと題名がなく、安然の『八家秘録』には「秘密記」一巻、海和尚作、とのみあって、『秘蔵記』という呼称も、後世の付加であるとわかる。

次に、『秘蔵記』の諸本について確認したい。『秘蔵記』の古写本には、次のような伝本が知られている。

1、寛弘八年（一〇一一）写　一帖　仁和寺
2、平安末期（院政期）写　一帖　高山寺
3、平安末期（院政期）写　一帖　高山寺
4、平安末期（院政期）写　一帖　高山寺（『秘蔵記末文』）
5、平安末期（院政期）写　一帖　高野山大学図書館三宝院文庫
6、平安末期（院政期）写　一帖　仁和寺（覚瑜本）
7、鎌倉時代写　一帖　仁和寺（杲清所持本）
8、鎌倉時代写　一帖　高野山金剛三昧院（尾欠）
9、観応三年（一三五二）写　一帖　高野山真別処（杲宝所持本）
10、室町初期写　一帖　正祐寺（高野山大学図書館寄託）
11、室町後期写　一帖　高野山大学図書館三宝院文庫（尾欠）

12、室町後期写　一帖　高野山金剛三昧院（前・尾欠）
13、永禄十年（一五六七）写　一帖　高野山金剛三昧院
14、元亀三年（一五七二）写　一帖　高野山大学図書館三宝院文庫

また、版本には、以下のものが知られる。

a、慶長十二年（一六〇七）刊　一冊　古活字版
b、江戸初期版　一帖　古活字版
c、江戸初期版　二帖　古活字版／整版
d、明和四年（一七六七）刊　一帖

古写本が多く現存する上に、版本も早くから複数回に渡って刊行されているなど、古来から空海の言説として重視され、必要とされていたことが、こうした広範な享受の実態からうかがわれるのである。

また、多くの学者が『秘蔵記』を重視し、注釈を施した。著名な注釈書を以下に列記する。

イ、『蔵中冶金抄』　成賢（一一六二～一二三一）述
　　深賢（？～一二六一）記
ロ、『秘蔵記鈔』　静遍（一一六五～一二二三）述
　　道範（一一七八～一二五二）記
ハ、『秘蔵記勘文』　信日（？～一三〇九）述
ニ、『秘蔵抄』　不詳
ホ、『秘蔵記聞書』　我宝（？～一三一七）述
　　頼宝（一二七九～一三三〇）記
ヘ、『秘蔵記蔵勘抄』　我宝述、道我（一三一四頃）記
ト、『秘蔵記私鈔』　杲宝（一三〇六～一三六二）述
　　賢宝（一三三三～一三九八）記
チ、『秘蔵記愚草』　賢宝述、清俊（不詳）記
リ、『秘蔵記伝授抄』　宥快（一三四五～一四一六）述
　　快全（一四二四頃）記
ヌ、『秘蔵記宝性合記』　健海（一五六八～一六三五頃）記
ル、『秘蔵記旨要鈔』　雄仟（一六二三～一六八八）記
ヲ、『秘蔵記拾要記』　隆瑜（一七七三～一八五〇）記

このように多くの研究書が陸続と作られており、著者名を見ても、真言教学史上、名だたる学僧たちが口述をしていることがわかる。現代においても、「秘蔵記聞書」（『栂尾祥雲遺稿集』聞書編巻第四所収）[2]や、『秘蔵記講伝』（『那須政隆著作集』第七巻所収）[3]などが刊行されるなど、現在まで、『秘蔵記』は刊行され続けている。

『秘蔵記聞書』の米田弘仁氏による解説には、次のように記す。

> 『秘蔵記』は、近年では大師の文とはみなされないとのことから読まれることが少なくなり、講伝も従来ほど行われなくなってしまった感がある。（略）『秘蔵記』を真に活用できるかいなかは、今後の僧侶・研究者の研究姿勢とその成果にかかっていると言ってよい。[4]

このように、現在は以前ほどには重視されなくなっているが、それでもなお、曼荼羅の解説など、短い一章一章の中に、他の文献には見られない『秘蔵記』ならではの表現や思想が記されていて、まだまだ研究する意義があるとされている。

さて今回、円覚寺にて発見された『秘蔵記』写本は、新出の古写本である。奥書はないものの、醍醐寺釈迦院に住した文海（一二九三～一三六一年以降、没年未詳）の署名があることから、少なくとも南北朝以前の写本であることが判明するもので、貴重な古写本といえる。

『秘蔵記』には広本と略本があるが、その定義は、米田論文[5]（七〇頁）

に、次のように示されている。

・略本……第一章「『大日経』の題額」に始まり、第百章「廻向陀羅尼」で終わる本

・広本……略本の後に、「密教観想道場観」「両界曼荼羅尊位」等、数箇章が加えられているもの

この定義にあてはめて円覚寺本を確認すると、略本系統の伝本であることがわかる。

それでは、古写本群のうち、どの系統に近いのだろうか。諸本を比較してみる。影印本が刊行されている「仁和寺本」と本文を比較すると、次のようになる。

仁和寺本	円覚寺本
大日摩訶毘盧遮那尾三菩提…	摩訶毘盧遮那尾三菩提…
（毘盧遮那・割注）是曰法界智	（毘盧遮那・割注）是曰法界智也
（四菩提・割注）是曰四行	（四菩提・割注）是曰四行菩薩
又釈迦眷属	又釈迦眷族
（百八尊・割注）此検文不可□之	（百八尊・割注）ナシ
為供養会	為供養会是名金剛界九会曼荼羅

以上のように、冒頭の語「大日」の有無に始まり、様々な違いが確認できる。また、第四章の金剛界九会曼荼羅は、仁和寺本に記されるが、円覚寺本にはない。

管見の限りで、本文の相違が少ないものは、『弘法大師全集』二（『真言宗全書』九も同じ）に所収される本文である。確認できる細かな違いについて、以下に、例を挙げてみる。

『弘法大師全集』所収	円覚寺本
胎蔵曼荼羅	阿閦等
（四仏の割注）阿閦等也	四波羅密
四波羅蜜	金剛現空還着仏身
金剛現空還著仏身	三昧真言印契
三昧耶真言印契	（頭欄外に、「耶イ」とあり）
是名金剛界四会曼荼羅	是名金剛界九会曼荼羅

このように細かな違いは確認できるものの、本文の系統としては、極めて近いものと判断される。

この他、円覚寺本の特徴としては、数箇所ある欄外注である。また付訓があるが、これについても細かな検討をする必要があるだろう。

以上、円覚寺蔵『秘蔵記』について述べてきた。文海の署名があることから年代がある程度比定でき、数多くある古写本のうちでも、南北朝期に遡れる写本で、新出の写本として貴重な伝本である。また表紙に「丈六堂　無量寿院」と墨書されることから、醍醐寺旧蔵本の一書とわかる。円覚寺への伝来経路は未詳であり、その点は今後の課題である。今後、伝本の比較など、細かな検討を加えていきたい。

（注）

（1）田戸大智氏のご教示を得た。

（2）「秘蔵記聞書」講師高岡隆心僧正（『栂尾祥雲遺稿集』聞書編巻第四、高野山出版社、二〇〇四年）参照。

（3）「秘蔵記講伝」（『那須政隆著作集』第七巻　真言密教事相講録上、法藏館、一九九七年、初出『成田山仏教研究所紀要』第二・三号、成田山仏教研究所、一九七七年一一月・一九七八年一〇

月）参照。

（4）米田弘仁『秘蔵記聞書』解説（『栂尾祥雲遺稿集』聞書編巻第四、四五一頁、高野山出版社、二〇〇四年）による。

（5）米田弘仁『秘蔵記』の成立年代」（『密教文化』一八六、一九九四年三月）による。

〔参考〕

・中川善教「秘蔵記についての序説」（『密教学研究』創刊号、一九六九年三月）

・大沢聖寛『『秘蔵記』の一考察」（『大正大学大学院研究紀要』創刊号、一九七七年）

・大沢聖寛『『秘蔵記』の写本について」（『豊山学報』二六・二七合、一九八二年三月）

・大沢聖寛「弘法大師の教学と秘蔵記」（『印度学仏教学研究』三六・一（通号七一）、一九八七年一二月）

・大沢聖寛「秘蔵記と弘法大師」（『印度学仏教学研究』三八・二（通号七六）、一九九〇年三月）

・大沢聖寛『『秘蔵記』の撰述年代について」（『密教学研究』二四、一九九二年）

・大沢聖寛『『秘蔵記』の成立年代再考」（『印度学仏教学研究』四七・二（通号九四）、一九九九年三月）

・大沢聖寛『『円城寺八巻次第』の引用文献について」（『印度学仏教学研究』四八・二（九六）、二〇〇一年）

・甲田宥吽「秘蔵記解説」（『定本弘法大師全集』第五巻、一九九三年）

・向井隆健『『秘蔵記』成立考」（『密教学研究』一五、一九八三年一二月）

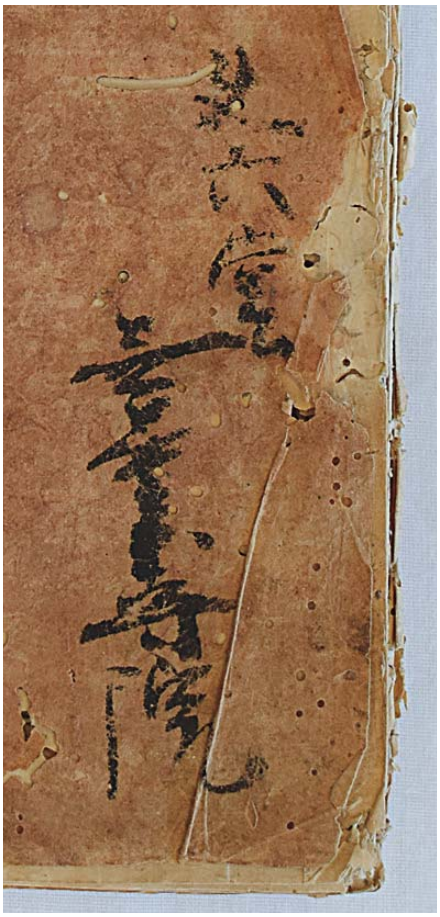
・米田弘仁『『秘蔵記』の成立年代」（『密教文化』一八六、一九九四年三月）

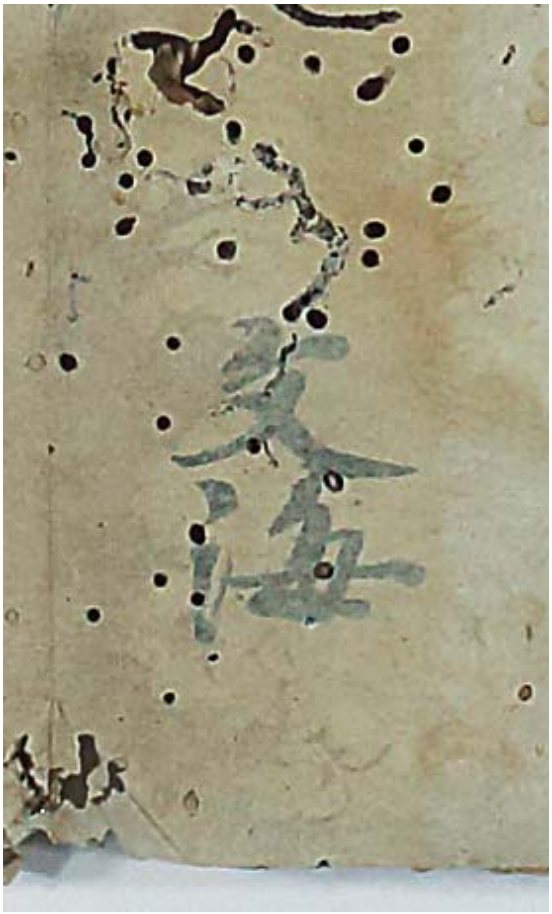
・細川真永「秘蔵記の成立問題」（『高野山大学大学院紀要』一一、二〇〇九年二月）

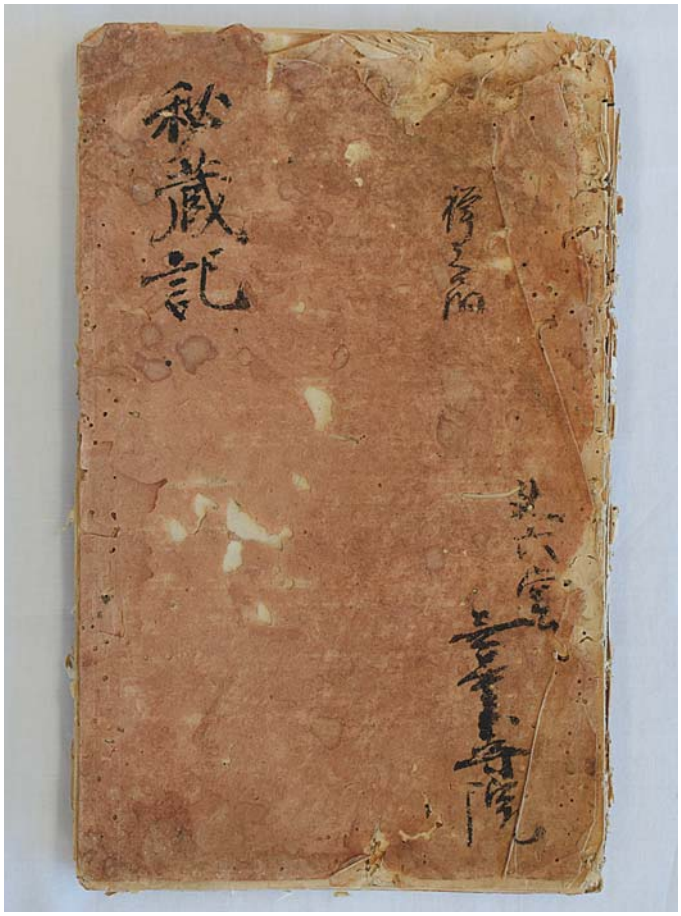
・『真言宗全書』解題、三四頁（真言宗全書刊行会、一九三七年）

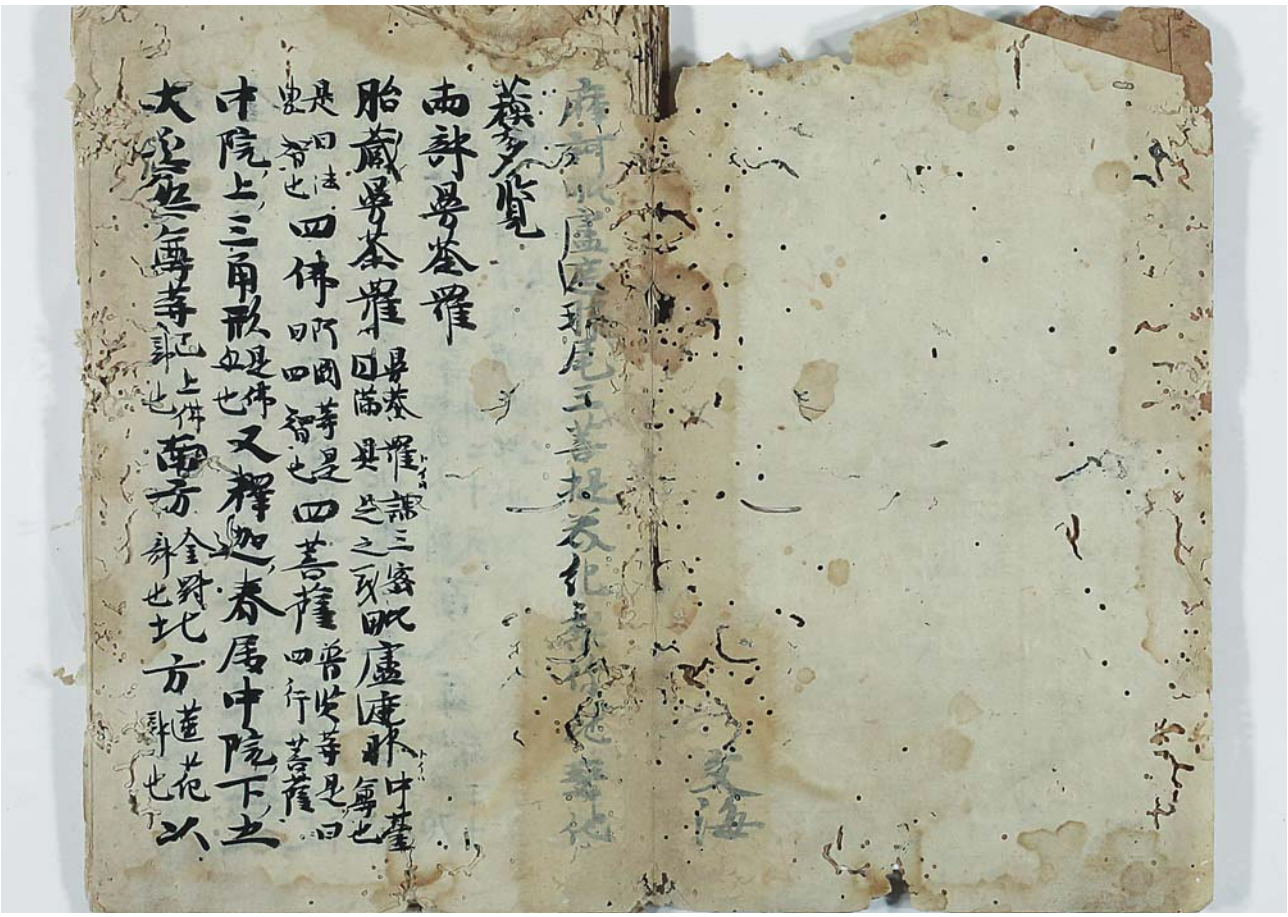
・上田霊城・大沢聖寛・布施浄慧監修『秘蔵記』（平成版　真言口訣大系Ⅰ、二〇〇二年）

・大沢聖寛『仁和寺蔵本　秘蔵記　翻刻・校訂・現代語訳』（ノンブル社、二〇〇九年）









薬多覧

西許異荼羅

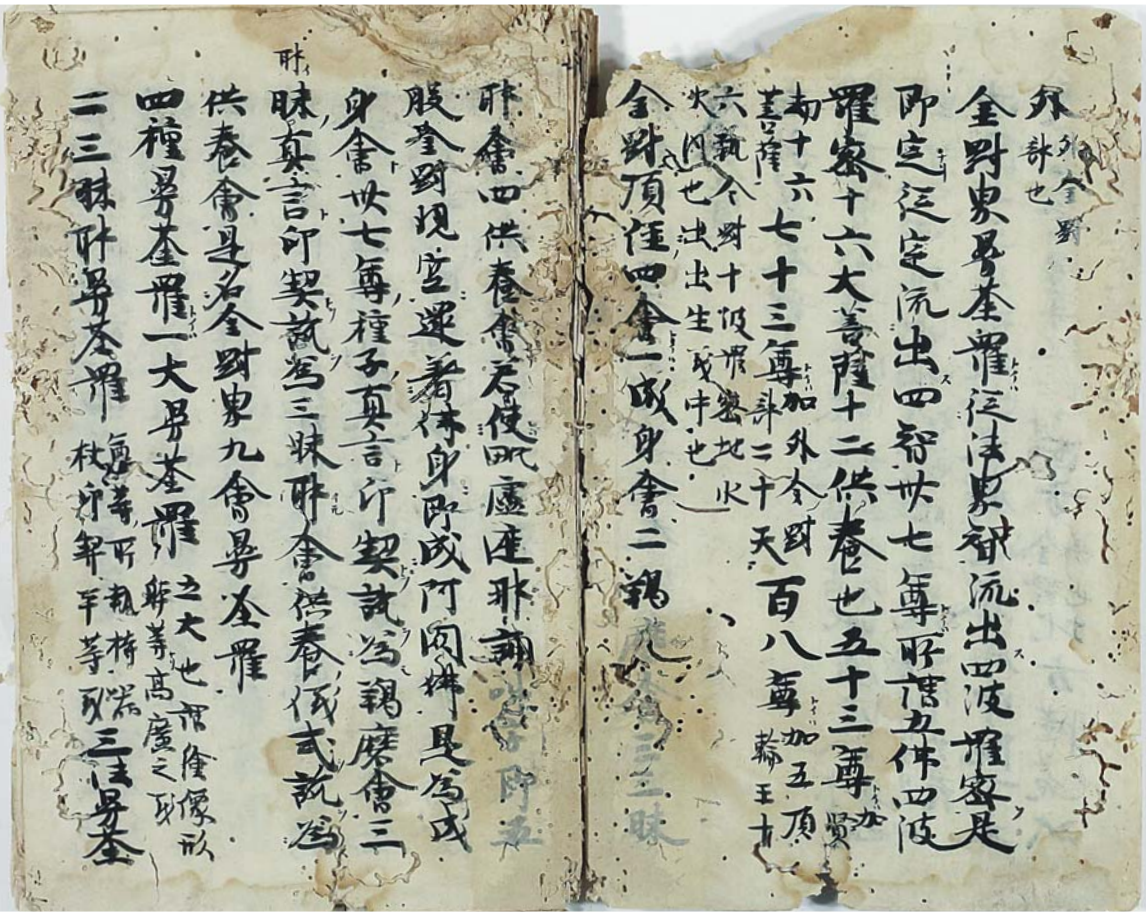
胎蔵異荼羅 異荼羅諸三密門滿足之義 毗盧遮那中臺尊也 是四法身也 四仏 阿閦等是四智也 四菩薩 普賢等是四行菩薩

中院上三角形 是仏如也 又釋迦 春屋中院下土

大悲 無尊等 上件也 南方 金剛部也 北方 蓮花部也 以

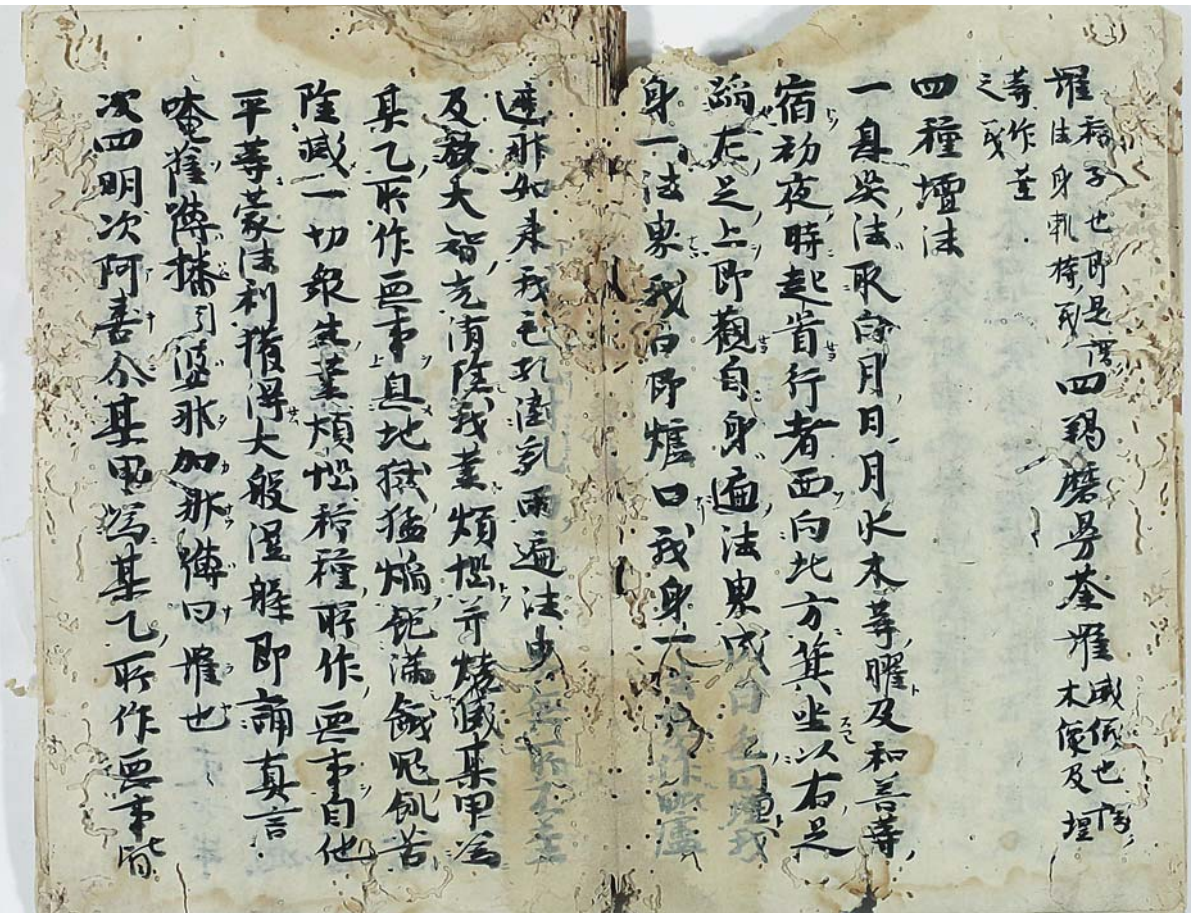
外金剛部也

金剛界曼荼羅法界流出四波羅密是
即定慧定流出四智妙七尊所謂五佛四波
羅密十六大菩薩十二供養也五十三尊加賢
劫十六菩薩七十三尊加外金剛部二十天百八尊加五頂幕王十
六執金剛十使眷屬也火火內也出生戒中也
金剛頂經四會一成身會二羯磨

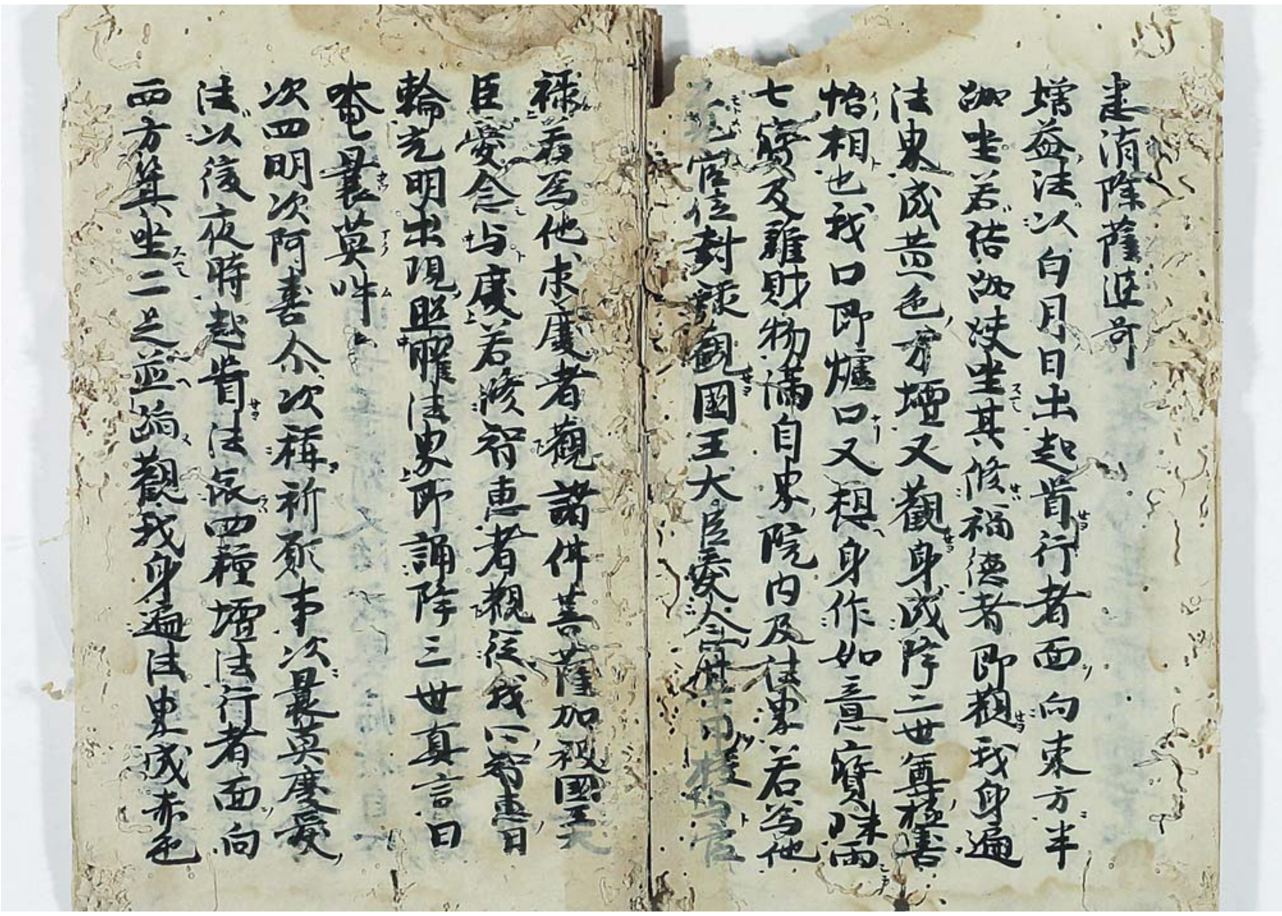


羯磨四供養會若使所應住非論
服塗香現空選者体身即成阿闍梨是名成
身會次七尊種子真言印契就為羯磨會三
昧耶真言印契就為三昧耶會供養儀式就為
供養會是名金剛界九會曼荼羅
四種曼荼羅一大曼荼羅之大也相像形
四種曼荼羅 每尊所執持器杖等高廣之形
二三昧耶曼荼羅 杖等平等形三法曼荼

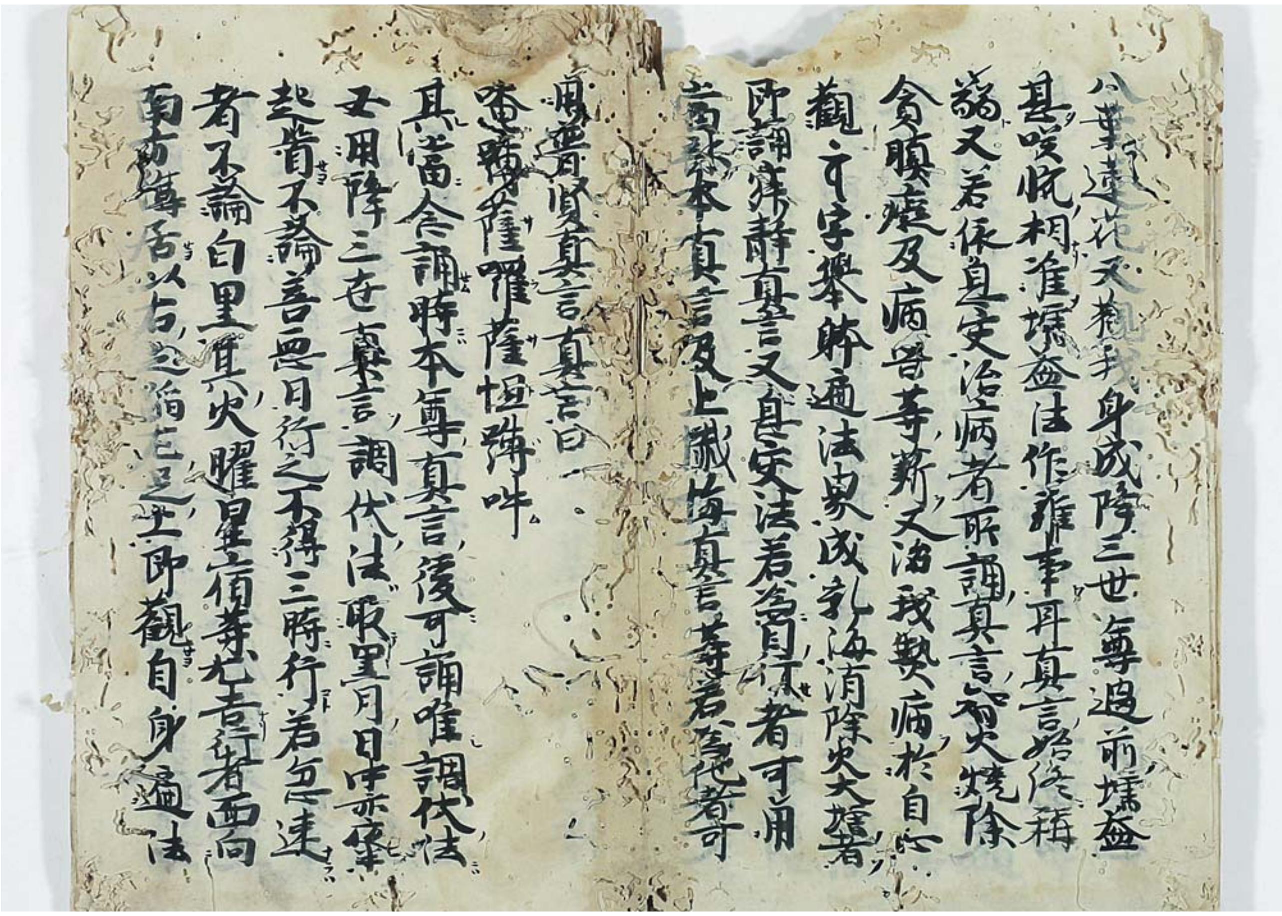
羅稱名也即是諸法身執持形
四羯磨曼荼羅 威儀也諸尊作業之形
四種壇法
一身業法取白月日月火木等曜及和善等
宿初夜時起首行者西向北方其坐以右足
蹈左足上即觀自身遍法界成[illegible]
身一法界我合即燈口我身一[illegible]



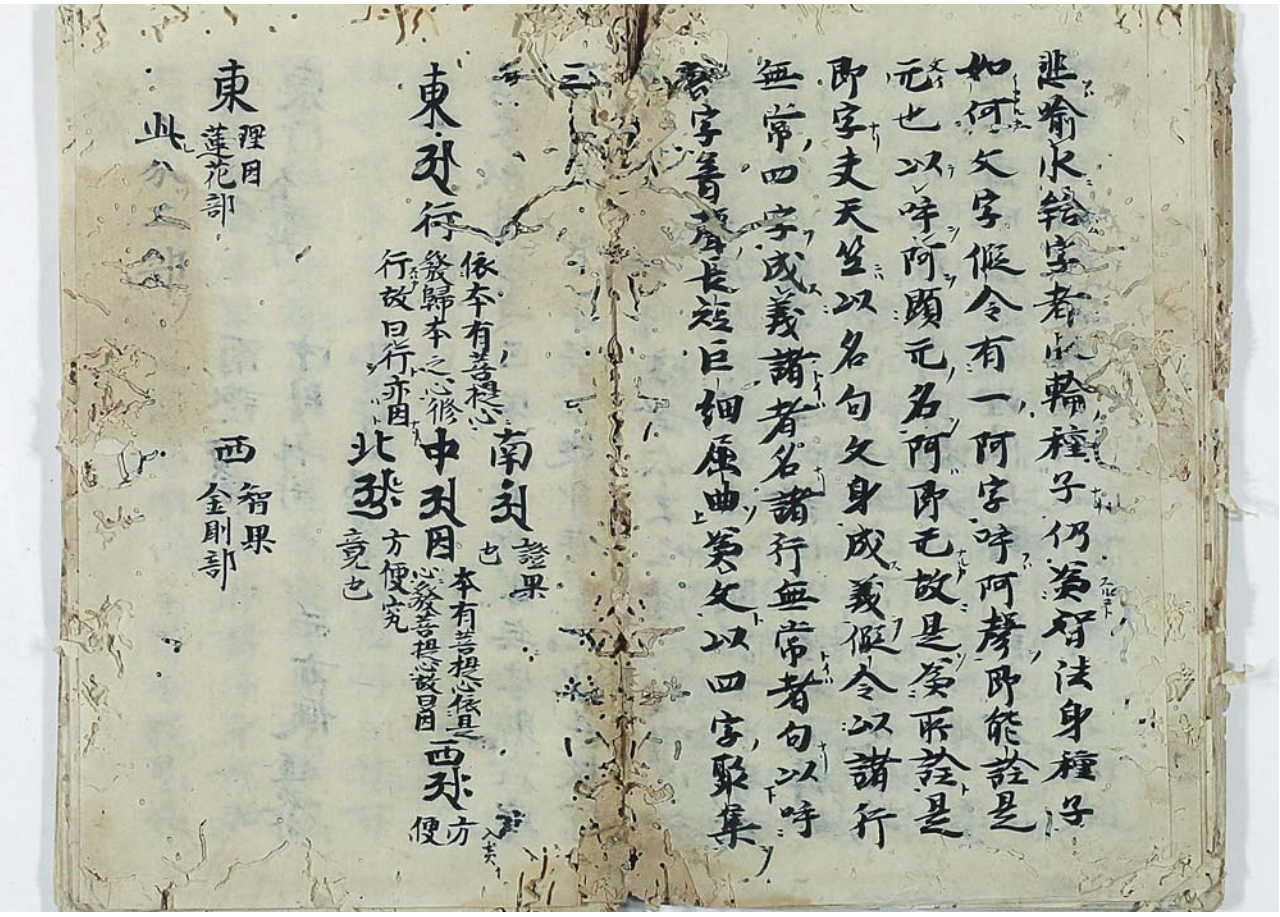
遍非如來我已孔法乳雨遍法界
及發大智光消除我業煩惱并燒滅其甲為
其乙所作無事其地獄猛焰飢滿餓鬼飢苦
陸滅一切衆生業煩惱行種所作無事自他
平等蒙法利獲得大般涅槃即誦真言
唵薩婆達摩引度那加那傳曰羅也
次四明次阿吉尒其甲為其乙所作無事



速消除障逆寄
増益法以白月日出起首行者西向東方半
跏坐若結跏趺坐其修福德者即觀我身遍
法界成黄色方壇又觀身成降三世尊極善
相也我口即壇口又想身作如意寶珠滿
七寶及雜財物滿自宗院内及法界若為他
若官位封禄國國王大臣安穩念供可祈官
禄若為他求度者觀諸佛菩薩加被國王大
臣愛念与度若修智恵者觀從我口智恵日
輪光明出現照曜法界即誦降三世真言曰
唵暴莫吽
次四明次阿吉介次稱祈願事次暴莫度愛
法以後夜時起首法依四種壇法行者西向
西方半跏坐二足並踏觀我身遍法界成赤色



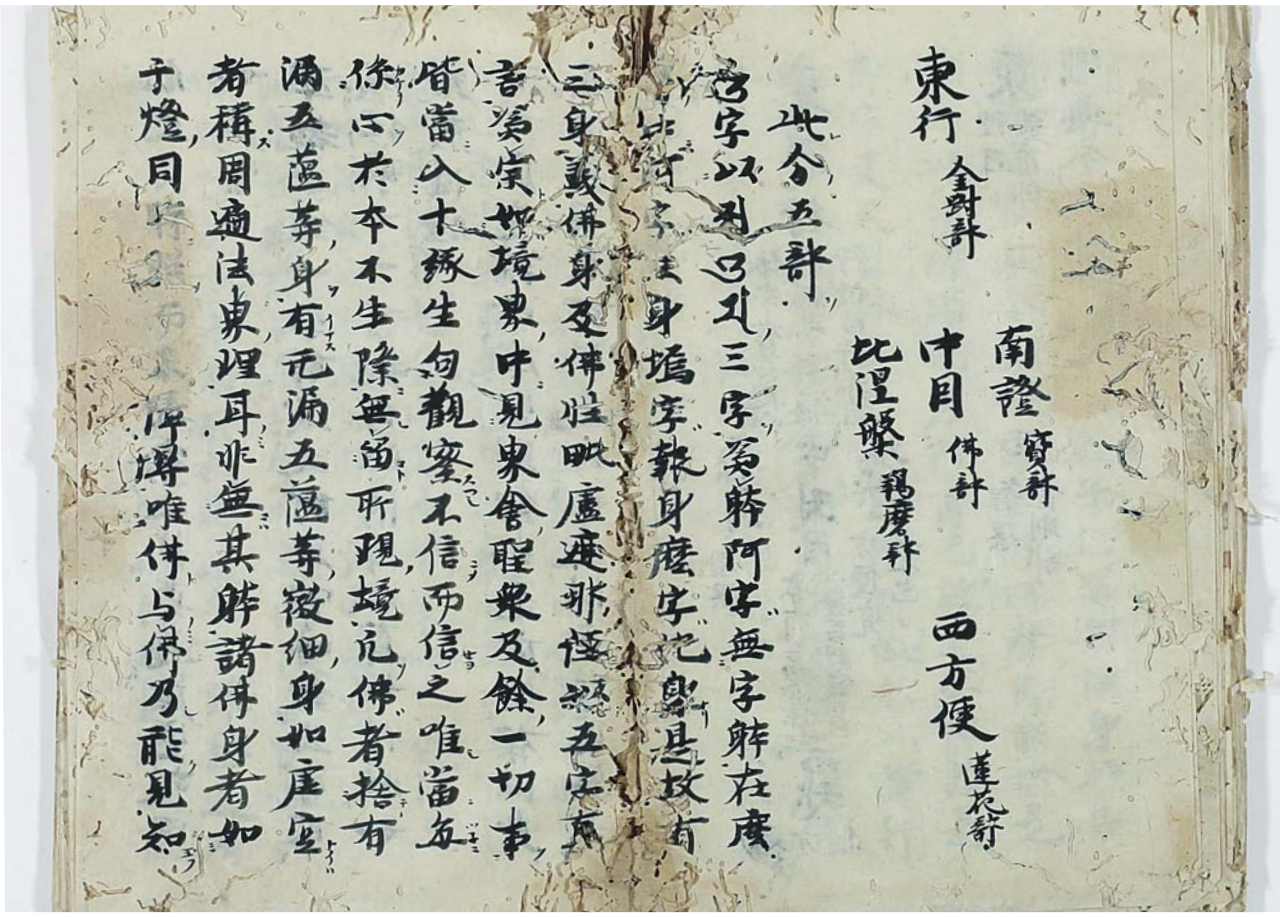
八葉蓮花又觀我身成降三世尊過前増益
甚咲悦相准増益法作雜事耳真言如後稱
讃又若係息災治病者取誦真言滅火燒除
貪瞋癡及病苦等斯又治我與病於自心
觀可字樂時遍法界成乳海消除災大難者
即誦淨諸真言又息災法若為自作者可用
當誦本真言及上滅海真言等若為他者可
用普賢真言真言曰
唵跋折羅薩埵悟啼吽
其當念誦時本尊真言後可誦唯調伏法
又用降三世真言調伏法取黒月日中或夜
起首不論善悪日行之不得三時行若欲速
者不論白黒其火曜星宿等尤吉行者西向
南方蹲居以右足踏左足上即觀自身遍法



譬喻水輪種子仍爲胥法身種子
如何文字假令有一阿字呼阿聲即能詮是
元也以呼阿頭元名阿即元故是爲所詮是
即字支天竺以名句文身成義假令以諸行
無常四字成義諸者名諸行無常者句以呼
字音聲長短巨細屈曲爲文以四字聚集

東 理因 蓮花部
此分 西 智果 金剛部

東 行 依本有菩提心發歸本之心修行故曰行亦因 南 證 證果也 本有菩提心依是發菩提心故曰 中 因 方便究竟也 北 涅 方便 西 涅 方便



東行 金剛部 南證 寶部 中因 佛部 北涅槃 羯磨部 西方便 蓮花部

此分五部

已字以刂已刂三字爲躰阿字無字躰在虛
空字以身塔字報身應字化身是故有
三身義佛身及佛住所處遍非怪哉五字有
言爲宗如境界中見衆會聖衆及餘一切事
皆當入十緣生句觀察不信而信之唯當自
依心於本不生除無留所現境亢佛者捨有
漏五蘊等身有无漏五蘊等微細身如虛空
者稱周遍法界理耳非無其躰諸佛身者如
于燈同 佛導唯佛与佛乃能見知

生住等諸法　常恒如是生

斯彼語也　問此語相配能造所造何也　答

初能生二字是能造也自餘諸句則所造也

問又四種法身四種曼荼羅及三種世間相

配何　答諸法與法相一句者配自性身

諸佛二字配受用身自聲聞乃至住尊配変

化身衆生二字則等流身也又過去二字是

法曼荼羅也法約二字三昧耶也自諸法

至衆生大曼荼羅也羯磨曼荼羅者各各

也及自諸法与法相乃至住尊者正覺安樂

明也衆生者衆生世間也器世間者則器世

界也　問生住等諸法常恒如是生二句於

三種世間之常元常相配何　答生住等

諸法一句者三種無常世間相配也常恒一

句者三種常住世間相配也

過句陀羅尼曰在宋版国住第一夫

唵一沙度二羅沙度合羅二微度句曩三沙

引羅四摩訶斫迦羅五合　佛上叶長声

則陀羅尼三字名十方三世佛也又當三世

佛者陀者英過去佛羅者英現在佛尼者英

未来佛又當衆生陀者英過去衆生羅者英

現在父母尼者為未来父母又陀者為地也

羅者為空也尼者為天也　覲畠在別式

秘蔵記